慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	春期鎌倉方面旅行記
Sub Title	
Author	淺村, 一郎(Asamura, Ichiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1941
Jtitle	史学 Vol.19, No.4 (1941. 3) ,p.137(721)- 138(722)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19410300-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

春期鎌倉方面旅行記

昭和十四年六月廿五日（日曜）曇後小雨で天候には惠まれなかつたが鎌倉方面へ恒例の春期見學旅行を決行した。一行は御指導下さる伊木先生外、間崎教授、鈴木先輩並びに學生廿一名の都合二十四名、東京驛を午前七時五十二分發の横須賀行の電車で同八時五十二分鎌倉驛着、直ちに日本自動車株式會社の大型バスに乘り先づ鶴岡八幡宮に參詣する。松並木の大道を左へ壽永元年三月源頼朝が鶴岡社頭より由比ケ濱まで築造した參道、若宮大路の一部分であると傳へてゐる「段葛」を横に見て第三鳥居の下で車を捨てる。承久三年正月二十七日の夜、別當公曉が身を隱し、右大臣源實朝の歸途を要して刺したと云ふ銀杏の大樹を左手に見て、石段を登ると、正面に總朱塗の樓門、その左右に廻廊があつて、社殿を取り圍んで居る。

參拜後、神宮に案内せられて廻廊に陳列してある寶物を拜見する。矚目の一部を列記すれば左の如くである。

一、鶴岡社務記錄　國寶　二卷
一、鶴岡八幡宮古文書　七卷
一、鶴岡八幡宮修營目論見繪圖天正十九年五月十四日　一鋪
一、辯才天坐像　一軀
一、梨子地籬菊螺鈿蒔繪硯箱　一合
一、金作衞府太刀　一振
一、絲卷太刀銘國吉　明治天皇御奉納　一振
一、朝鮮鐘至次四年正月十九日の銘あり　一口

就中、記錄、古文書、繪圖の三種は、特に別室に於てゆつくり拜見した。

八幡宮を辭して、程近き鎌倉國寶館に至る。同所で見學した主なものは次の如くである。

一、後醍醐天皇綸旨白紙　一通極樂寺藏
一、瑞鹿山圓覺禪寺黃梅院華嚴塔勸緣疏　一卷圓覺寺藏
一、木造阿彌陀如來像　藤原時代　一軀證菩提寺藏
一、木造釋迦如來像　鎌倉時代　一軀極樂寺藏
一、木造十大弟子像元永五年の銘　鎌倉時代　十軀同
一、木造地藏菩薩像　鎌倉時代　一軀淨智寺藏
一、木造地藏菩薩像　鎌倉時代　一軀壽福寺藏
一、銅造阿彌陀如來及兩脇侍像　鎌倉時代　三軀圓覺寺藏
一、銅造十一面觀音懸佛　嘉曆元年十月九日の銘　一體長谷寺藏
一、木造五輪塔　鎌倉時代　一基金剛寺藏
一、上杉重房木像　室町時代　一體明月院藏
一、銅鐘寶治二年北條時頼祖父泰時追善の爲鑄造せるもの　常樂寺藏
一、堆朱印櫃入木印二顆　報國寺開山佛乘禪師所用

報國寺藏

正午同館を辭去した一行は、鈴木屋旅館で中食をすませ、午後一時過ぎ再びバスに乘り、二階堂醫王山の麓にある官幣中社鎌倉宮に參拜し、此所でバスを捨て、谷間の小道を小雨に濡れ乍ら北方へ徒步で六七町、建保年間北條義時の建立と傳へる覺園寺に至る。突然の參叩にも拘らず、大野住職の非常な歡待を受け、左の寺寶を拜觀した。

一、石造寶篋印塔　正慶元年壬申仲冬廿七造立開山大和尙の刻文あり　一基
一、大燈和尙塔　正慶元年壬申仲冬廿八の刻銘あり　一基
一、木像地藏菩薩（俗稱黑地藏）　鎌倉時代　一軀
一、木像愛染明王像　鎌倉時代　一軀
一、木像藥師如來像　鎌倉時代　一軀
一、銅造不動明王像　鎌倉時代　一軀
一、後醍醐天皇御木像　高村光雲作
一、木札

午後二時半覺園寺を辭去再び元來た道を戻り、宅間ヶ谷にある報國寺に赴いたのであつたが塾よりの紹介狀が未着、且つ住職不在で、寶物觀覽の用意なき由で、せん方なく、次の機會に讓り、更にこれも突然であつたが同寺を距る二三町にある天平年間行基の創建と傳へ、坂東三十三番札所第一番の杉本寺を訪ねる。

こゝも生憎住職が法要の爲め不在で國寶十一面觀世音の御開帳が出來ず、暫時御堂に休みながら待つ。境內は老杉木欝蒼と茂り御堂前の石段は苔に覆はれ、いかにも古刹の面影がしのばれる。ふと見ると小さな御詠歌の額が掛つてゐる。「賴みあるしるべなりけり杉本の誓ひは末の世にもかはらじ」と。

五時になつたが、住持はまだ歸られぬ。そこで先生が木魚の伴奏で住職の代理を勤められ、御開帳をする。一同ローソクの火で本尊、脇侍を拜觀する。孰れも木造の立像で、中央の御本尊は慈覺大師の作と傳へ對好圓滿莊重な作である。右にあるのは行基の作と傳へ一木の古拙な像である。左にあるのは惠心僧都の作と傳へ兩手に來迎の印を結んで、上下に捌き、その姿體極めて優美である。中央と左との二體は國寶に指定されてゐる。

かくて五時すぎに同寺を辭去し、急ぎ徒步で鎌倉驛に向ふ、プラツトホームで小泉塾長に御會ひする、五時五十分鎌倉發の電車で一同歸京の途に就いたのである。當日は殘念なことに天候に惠まれなかつたが、近距離の見學であつた爲め樂な氣持ちで各自史囊を肥し得たのは何よりであつた。玆にこの旅行記を擱筆するに當り各所に於てうけた御厚意に對し深く感謝の意を表する次第である。（淺村一郎記）

三田史學研究會例會報告

昭和十五年
五月七日（火）午後四時於昧ノ素ビルアラスカ（第三百回例會）
前漢に於ける都市の治安問題　黑田豐成君
曆の話　幸田成友氏
五月二十一日（火）午後三時於交詢社內慶應倶樂部談話室